

## 2013年3月24日受難週礼拝 イザヤ 52:13-53:12 「苦難のしもべの歌」

今お読みしましたのは、「苦難のしもべの歌」と呼ばれる有名な預言です。これは、ある意味では聖書の中心と言ってもよいところです。新約聖書の中に、直接的間接的にこの「苦難のしもべの歌」に触れているところがたくさんあります。一番分かりやすいのは、使徒言行録 8:26 からです。少し長いですが、読んでみましょう。

(使徒言行録 8:26-38 を読む)

ここにはエチオピアの宦官というエキゾチックな存在が登場する。エチオピアの女王カンダケの全権大使として、外交のためにユダヤまで来ていたのでしょうか。あるいは、わざわざエルサレム神殿に礼拝に来ていたのでしょうか。いずれにしろこの宦官はエチオピア人でありながらも、ユダヤの神である主をしたって礼拝し、聖書に親しんでいた者であったようです。そして熱心にイザヤ書を朗読していた。彼が読んでいたのがまさにこの苦難のしもべの歌なのです。32節から。そして考えた、預言者はだれについてこう言っているのか？「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」と書かれている。この人とは、一体誰のことだ。この問いに対し、キリスト教会の伝道者であるフィリポが答えるのです。これは、イエス・キリストのことだ。この預言は、十字架の死にいたるイエス・キリストの苦難に満ちたご生涯を、すでにその 500 年前に予告していたものです。まるで十字架の下にたたずんで、すべての出来事を見届けたかのようにして書かれた、古の預言者の言葉。そしてその十字架の死の意味を、私たちに教えるために、神が与えてくださった解き明かしの言葉でもあります。

今日から私たちは受難週に入りました。受難週というのは、教会暦におきましてイースター前の最後の一週間です。伝統的に教会におきましては、キリストの十字架の苦難を思いながら、自らの罪を悔い改める時としてこの受難週を過ごします。特に教会暦を大切にする教派では、今週の金曜日を受難日、聖金曜日として、金曜日に十字架にかけられたイエス様を思って礼拝をしているようです。イエス・キリストという方はおよそ 2000 年前にこの地上で人間として生まれ、生き、そして十字架にかかって死なれました。そして確かに死んで墓の中に入れられた後、復活なさって、その後天に上られたと、私たちは信じます。この復活以降の出来事については、そんなことはありえないと決して信じようとされない方もいますが、十字架で死なれたということは歴史的にも疑いようのないことです。その死にはどんな意味があるのか？これも当然のことながら意見が分かれることでしょう。革命を試みた若者が挫折した結果としての処刑だと考える人もいます。しかし、キリストの教会は、この十字架の死は、私たちの罪の身代わり、犠牲なのだと信じます。

十字架にかけられるというのは、この時代にあつて最も屈辱的な処刑方法だったと言われます。ただ、それ以上に大切なことは、十字架にかけられたというのは、呪われた死を死んだと見なされたということです。ガラテヤ 3:13p346「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてある。これは申命記 21:23 を前提にして書かれています。十字架の死というのは、残酷だとか惨めであるということ以上に、神から呪われた死を死ぬということなのです。イエス・キリストは、そんな呪われた死を死なれました。それは、私たちの身代わりであり、私たちのためのいけにえの犠牲であったということです。イエスは十字架にかけられることで、私たち全人類に向けられていた神の怒りと呪いを、その体と魂にすべて引き受けてくださったということです。そんなイエスの十字架の意味が教えられているのが、まさに今日の「苦難のしもべの歌」なのです。

先にも申しましたようにこの預言は、十字架の死にいたるイエス・キリストの苦難に満ちたご生涯を予告していたものであり、またその十字架の意味を教えて下さる神からの解き明かしです。順番に読んでいきましょう。

53章2節「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない」これはイエス様があまりにも弱々しい、貧弱な姿で世に生まれ育ち、人々の前にあらわれるということの意味します。あのクリスマスの真っ暗な闇の中でのイエス様の誕生、そしてその後のナザレの村での貧しい生活を思い起こさせるような言葉です。

3節「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた」イエス様は地上生涯において、ずっと孤独を味わっておられました。誰からも理解されることなく、弟子たちからも最後は裏切られ、見捨てられる。この方は、人間を救うために来てくださった神の子でしたが、人間は決してこの方を受け入れませんでした。たくさんの人の痛みを自分の痛みとして引き受け、様々な病気をいやし、だれも近寄ろうとしない重い皮膚病の人々にもちかづいていかれた愛の人でした。でも人々は、そんな彼を軽蔑し、変わり者、異端者として共同体から排除しようとした。そして、彼を十字架にかけたのです。

捕えられたイエス様は、人々からつばを吐きかけられ、散々にののしられました。それは彼の罪にふさわしい報い、神の裁きだと、人々は言いました。そんな惨めなイエス様の姿を見て、いっしょに十字架にかけられた犯罪人さえもイエス様をののしりました。メシアだなどと自称して神を冒瀆した、この男は裁かれるにふさわしい……。しかしそうではないのです「**彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。**」

ここに、驚くべきことが書かれています。私たちの代わりに、私たちの罪を背負って、痛み

を、病を代わりに担って、一人の人が刺し貫かれる。その彼の受けた傷によって、私たちは癒され、罪を赦され、神との間に平和を与えていただく。すなわち、和解による正しい関係の回復を与えていただく。そのようにして滅びるべき私たちが滅びず、苦難の僕イエスだけが滅びる。我々の代わりに、我々のために、惨めさを忍び、貧しい生涯を送られ、虐げられ、軽蔑され、痛みを負い、そして十字架で死んでくださる、そのイエスの滅びを通して、私たちは滅びを免れる。そういう驚くべき救いの計画がここで明らかにされています。

それこそが父なる神の思いであり、望みでありました。6節「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。」“主は”彼に負わせられた。しかし主は！と、主なる神という主語が強調されています。それを望まれたのは主なのだ、と強調しているのです。私たちは羊の群れだったとあります。羊飼いの言うことを聞かずに道を誤り、それぞれの方角に向かっていた羊たち。それは神に背き、自分を神として、自分の欲望のおもむくままに生きる神なき人々の姿です。でもそういう人々のすべての悪を、主は彼に負わせようとされた。彼以外のすべての者を、救いへと招くために、すべての悪を、神はこの僕に負わせられたのです。そういう神の御心にしがたって、僕イエスは十字架への道を歩むのです。

それはイエス様にとって、取り去ることができるものならば取り去っていただきたいと願ったほどの苦しみでした。しかしイエス様は、わたしたちのために、その苦役を黙って受け入れられました「7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。」

「8 捕えられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。彼は不法を働かず、その口に偽りも無かったのに・・・」イエス様は不法を働きませんでした。その口からは真実の言葉だけが語られました。この方は、すべての悪しき思いから自由に、のびやかに、神を愛し人を愛して生きられたのです。ですからイエス様には、十字架の苦しみに値するような罪がないのです。しかしイエス様は、その苦しみを甘んじて引き受けられました。それは私たちのためです。地上に生きた人間の中で、ただ一人罪のなかったこの人が、私たちの罪のために苦しみをお受けになります。「多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った」とあります。ご自分の犠牲によって私たちが正しい者とされて救われる。それが神の思いだから、神の望みだから、イエス様は口を閉ざしたまま、自らを償いのささげものとして御前に差し出されたのです。

12節にはその消息を「彼が自らを投げ打ち死んで、罪人の一人に数えられた」という言葉で言っています。「自らを投げ打ち」とは「かめの水をすっからかんにカラッポにする」という時にも使われている動詞です。まさにイエス様は、自分の命をすっからかんにするまでに使い切って、神の怒りと呪いをご自身に引き受けてくださり、私たちと神とのあいだに平和を与えてくださったのです。こうして神が望まれた救いの計画が、イエス・キリストの受難によって成就

されるのです。

この「苦難のしもべの歌」が、イエス・キリストの十字架の死にそのような意味を与えています。同時にまた、イエス・キリストの十字架の死が、この「苦難のしもべの歌」に答えを与えています。「多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」この人とは誰だ？というエチオピア人の問いには、はっきりとした答えが与えられたのでした。この人はイエス・キリストです。この方が、あなたを永遠の滅びから救い出してくださる救い主です。エチオピアの宦官は、それを聞いてすぐにイエスを信じ、洗礼を受けました。それは、自分が救われる必要がある罪人だと、はっきりと悔い改めが与えられたからでしょう。

・・・わたしたちはどうでしょうか。今日のこの「苦難のしもべの歌」が私たちに教えてくれるのは、苦難のしもべとは誰であるかだけではありません。「わたしたち」とはどのような存在であるかも、考えずにはられません。これまで読んできてお分かりのように、何度も「わたしたち」と繰り返されている。イエス様が、苦難の僕として苦しまねばならなかったのは、わたしたちの背きのため、わたしたちの咎のため・・・わたしたちの病を担い、わたしたちの痛みを負ってくださった。そして、彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた・・・。

「わたしたち」は、イエスの十字架によって「いやされねばならない存在」であると、この歌は教えてくれています。いやされねばならない病人であるのです。思い出したのがエレミヤ 17:9の御言葉です。「人の心は何にもまして、とらえがたく病んでいる。誰がそれを知り得ようか。」わたしたちはまさに、霊的に、また根源的に、とらえがたく病んでいる罪人です。この根源的な病を見つめたいと思うのです。

今、肉体の病を得て、苦しんでおられる方もいらっしゃると思います。あるいは心の病を得て苦しんでおられる方もいらっしゃいます。でも私たちは誰もがみんな、より深い次元において、病んでいるのです。神との垂直な関係において、決定的に歪んでいるのです。それゆえに、どうしようもなく不安なのです。どうしようもなくさみしいのです。この根源的な病に向き合いたいと思います。イエス様の愛は、そこに届いてくるからです。

私自身、今回、説教の準備をしながら、自らの罪について深くかえりみさせられました。特に、一人の若者との対話の中で、そのことを思わされました。実は今日の日曜学校で、私たちの教会の一人の若者がはじめて「おはなし」を担当するというので、そのために今年の初めから教案誌を通して聖書を学び、私とも数回学びを繰り返して、初めてのメッセージの大役のためによく準備をしました。その準備をする中で、彼が私に伝えてくれた言葉が印象的でした。「自分には子どもたちに語る資格がない。聖書もあまり読もうとしない、お祈りも怠っている。人を愛せない・・・こんな自分には・・・。」それは、子どもたちに福音を伝えようと真剣に取り組んだ結果として、彼自身に与えられた、自分の誤りへの気づきでした。神と真剣に向き合う

ならば、自分とも向き合わざるを得ません。そうして向き合った結果として、自分の大きな欠けに気付かされたのでしょう。それは本当に大切な、大きな大きな一歩でした。

振り返って、私自身も本当に同じだと考えさせられました。私にも、語る資格などない。牧師として人の魂を配慮し、導くことのできるようなものではないと、思わされました。人間的な欠けの大きいものです。傷つきやすく、それゆえに人を傷つけやすいものです。このような者が牧師と名乗っていていいのだろうか、いやキリスト者と名乗っていていいのだろうか、自分の根源的な弱さや、欠けや、間違いを思わずにはられません。でも、そのようなものを「いやす」ために、主イエスは生まれて来てくださったのだ、そして十字架にかかってくくださったのだと、今日の御言葉は教えてくれます。そのようなお前を、永遠の不安から解き放つために、私が十字架にかかったのだと、主が教えてくださいます。本当に、かたじけない思いがします。

・・・私たちには、主の十字架の傷によって、いやされる必要があります。